

保育者養成課程における「乳児保育」の課題 — 保育実習Ⅰ・Ⅱの3歳未満児クラスでの体験に着目して —

上原由美・原田明子

Issues of “infant care and education”
in the childcare worker training course.
— Focusing on the experiences of a class for the children less
than three years old in the teaching practice I・II —

Yumi Uehara・Akiko Harada

I. 問題の所存と目的

近年、保育施設での乳児保育の需要は高まっている。2015年（平成27年）に子ども・子育て支援新制度が始まり、認可保育所、認定こども園、地域型保育所の各事業等、乳児保育を行える施設が急速に広がった。1.2歳児の保育利用率は、平成27年に27.6%であったが、令和2年度には50.4%¹⁾と上昇している。1.2歳児の半数以上が保育施設を利用している時代である。また、「非認知能力」の重要性が明らかになり、乳幼児期の育ちの重要性が広く認識されるようになってきた。

平成29年4月に告示された保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領で、3歳未満児の保育を、0歳を対象とした「乳児保育」及び「1歳以上3歳未満児の保育」に区分したり、養護の理念を明確にしたり、乳児保育の充実が図られている。また、保育士養成課程は平成31年に、それまでの乳児保育（演習）から、乳児保育Ⅰ（講義）・乳児保育Ⅱ（演習）に改定され、乳児保育の充実及び幼児教育の実践力の向上、子どもの育ちや家庭支援の充実、保育者としての資質・専門性の向上という方向性が示された。

このような乳児保育の需要の高まりとともに、保育者養成校の授業での学びを実践にいかせるように授業内容の見直しを行っていかねばならない。児童福祉法では「乳児」とは1歳未満の者のことであるが、ここでいう「乳児保育」とは保育所等で使用される用語であり、3歳未満児の保育のことである。保育者を目指す学生が、養成校で学んできた知識や技能を保育実践に応用できる力を培うことができるのが実習である。核家族化・少子化が進んでいる現代社会において、保育学生と実際の乳幼児との関わりは減少している。さらに、コロナ禍による中学校や高等学校での職場体験も行われなくなってきたことにより、保育者養成校入学前に乳幼児と接した機械や経験がほとんどない学生も少なくない。特に人との信頼関係を築き、養護を基盤に教育へ繋げていく3歳未満児の保育は、理論だけでなく実際に直接関わることで理解を深めることができる。このような状況において、実際の乳幼児と関われる実習の意義は大きい。保育者養成校に在学中行う保育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、乳幼児と関わる楽しさを体感しな

がら、保育者としての自信を獲得し、資格・免許取得に意欲を高めることもある。実習を通し基礎的な理論と実践が一体となり乳児保育への理解を深めることが重要な機会である。

保育者養成校で保育士資格を取得するために必要な保育実習日数は、最低で保育実習Ⅰ（保育所）は、おおむね10日間である。保育実習Ⅱ（保育所）・Ⅲ（施設）は選択であり、Ⅲ（施設）を選択した場合、保育所等での実習は、保育実習Ⅰ（保育所）のみとなり、おおむね10日間である。保育実習Ⅱ（保育所）を選択した場合は、保育実習Ⅰ（保育所）と合わせおおむね20日間である。10日あるいは20日という決められた期間の中で3歳未満児クラスと3歳以上児クラス（幼児クラス）で実習を行うことになる。

実際の保育実習Ⅰ（保育所）・Ⅱ（保育所）でどれくらい3歳未満児クラスにおいて実習をしているのか、小屋美香²⁾の研究によると、保育実習Ⅰ（保育所）では、0歳児クラスでの実習日数平均1.6日、1歳児クラスでの実習日数平均1.8日、2歳児クラスでの実習日数平均2.2日である。保育実習Ⅲ（施設）を選択しても、保育施設に就職する学生もいる。卒業後、即戦力として求められることが多い保育者である。今回調査した2校では、保育職に就いた卒業生の64%が新任時に3歳未満児の担任をしている。保育実習の期間中、3歳未満児クラスで豊かな経験をする中で、保育現場に出たからの困惑を減らすことができると考える。そのためにも、10日間あるいは20日間の保育実習Ⅰ（保育所）・Ⅱ（保育所）における3歳未満児クラスでの体験や課題を知ることにより、乳児保育の授業の充実を図りたいと考えた。

そこで本研究では、保育士養成課程の学生が保育実習Ⅰ（保育所）・Ⅱ（保育所）において、どの程度の日数を乳児クラスで実習を行っているのか。また、どのような体験を行い、どのようなことが大変と感じていたのかという実態を明らかにする。さらに、これらの結果をもとに乳児保育の充実をはかることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1) 調査対象

保育者養成のA短期大学で、保育士資格を取得できる2年制課程の卒業年次生129名（女性123名、男性6名）。保育者養成のB専門学校で、保育士資格を取得できる2年制課程の卒業年次生43名（女性40名、男性3名）、保育士資格を取得できる3年生の課程の卒業年次生23名（女性21名、男性2名）。

2) 調査期間

調査期間は2021年11月上旬から12月下旬に実施した。

3) 調査手続き

保育実習Ⅰ・Ⅱに関する質問項目を設定し、調査学生を対象にWebアンケート作成ツールGoogle Formsを用いてアンケート調査を実施した。調査実施前に、調査の趣旨と回答データの取り扱いや調査協力の任意性について説明を行い、同意の得られた者のみ調査協力を求めた。

表1 A短期大学(2年生課程)実習計画

実習時期		実習名称
1年次前期	5月	教育実習5日間(内部園観察実習)
1年次後期	10月、11月2期間分け	教育実習5日間(外部園観察実習)
1年次後期	2月～3月	保育実習Ⅰ(保育所)
2年次前期	6月	教育実習2週間
2年次夏休み期間	8月、9月2期間分け	保育実習Ⅰ(施設)
2年次後期	11月	保育実習Ⅱ(保育所)・Ⅲ(施設)

表2 B 専門学校(2年生課程)実習計画

実習期間		実習名称
1年次前期・後期	5月、6月、9月、11月	グループ園実習(2日×2回、4日×2回)
1年次後期	2月	保育実習Ⅰ(保育)
2年次前期	6月	保育実習Ⅰ(施設)
2年次後期	9月	教育実習Ⅰ・Ⅱ
2年次後期	11月	保育実習Ⅱ(保育)・保育実習Ⅲ(施設)

表3 C 専門学校(3年生課程)実習計画

実習期間		実習名称
1年次前期・後期	5月、7月、10月、12月	グループ園実習(2日×2回、4日×2回)
2年次前期	6～7月	保育実習Ⅰ(保育)
2年次後期	10月	保育実習Ⅰ(施設)
3年次前期	6～7月	教育実習Ⅰ・Ⅱ
3年次後期	9～10月	保育実習Ⅱ(保育)・保育実習Ⅲ(施設)

Ⅲ. 結果と考察

1) 保育実習Ⅰ・Ⅱにおける3歳未満児クラスに配属された日数

保育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、0歳児クラス、0.1歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラスに配属された日数の平均は、0歳児クラス0.9日、0.1歳児クラス0.7日、1歳児クラス1.2日、2歳児クラスは1.7日である。

0歳児クラス配属日数は、配属なしが一番多く、保育実習Ⅰで43%、保育実習Ⅱで47%である。次に1日間が保育実習Ⅰ・Ⅱともに35%であった。これは、実習園に0歳児クラスがない、もしくは、0.1歳児混合クラスの場合もあるためだと推測する。一番配属された日数が多かったのは5日間で、保育実習Ⅰで1%、保育実習Ⅱは3%である。ごく少数であるが実習期間の約半分の日数を0歳児クラスで経験した学生もいる。

0.1歳児クラス配属日数は、配属なしが一番多く、保育実習Ⅰは53%、保育実習Ⅱは71%であった。前述のとおり実習園に0.1歳児混合クラスがないためだと推測する。保育実習Ⅰでは、配属された学生の95%が2日以内であった。ごくまれではあるが、8日間配属された学生もいた。保育実習Ⅱでは、配属された全員が3日以内であった。保育実習Ⅰでの8日間配属された学生はまれではあるが、このようなケースもあり得ることがわかった。

1歳児クラスの配属日数は、配属ないが一番多く、保育実習Ⅰは33%、保育実習Ⅱは35%であった。保育実習Ⅰでは、配属された97%は2日以内であった。保育実習Ⅱは84%が2日以内であった。しかし、7日間、8日間、10日間配属された学生もいる。両校とも保育実習Ⅱは、卒業年次で行っており、最後の実習である。そのため、実習でどのクラスで学びたいか目的が明確であり、自身で配属希望のクラスを園に伝えているためだと推測する。

2歳児クラスの配属日数は、保育実習Ⅰでは、2日間が一番多く、53%であった。3日間～6日間配属された学生は9%であった。保育実習Ⅱでは、1日間が一番多く、40%であった。配属された学生は2日以内が78%であった。2%の学生が10日間配属されていた。保育実習Ⅱでは、2歳児クラス配属については、0歳児クラスの配属と比較すると配属日数のばらつきがみられるが、配属なしを除いて多数の学生が1日間もしくは2日間であった。

3歳未満児クラスでの実習は1日間及び2日間が大多数であることがわかった。ある程度の生活のリズムができていない3歳以上児クラスとは違い、授乳や睡眠等個別に対応している3歳未満児クラス等では、一日の様子がわからず生活の流れを知るだけで一日が終わってしまう場合もあるであろう。また、言葉でのコミュニケーションが難しく、身振り手振りや表情を介しての非言語的コミュニケーションにより意思の疎通を行わなければならなかったり、人見知りの時期であったりと、子どもたち一人ひとりの特徴を理解しなければ適切な援助が難しいのもこの時期の特徴である。配属された1～2日間で、自分で目的意識をもって学びを深められるようにしなければならない。

実習園の考えにより配属クラスは変わってくる。実習巡回時に園の実習担当者から「0歳児クラスから5歳児クラスまで順番に配属することで成長・発達の違いを学び取って欲しい」という話を聞くことが度々ある。実習では、すべてのクラスを経験することで、子どもたちの長期的な発達の違いを縦の繋がりで学ぶことができる。また、同じクラスで一人の子どもの育ちを丁寧にみていくこと、クラスという集団の中で個の育ちをみることなど、個や横との繋がりを学ぶことができる。どちらも重要な学びであるが、人見知りや個人差が大きい等の発達特徴を考慮すると、同一クラスでじっくりと関わるのがより深い学びに繋がると考える

森、後藤、古市⁴⁾によると、保育実習で配属を希望するクラスの理由として、一番多かったのが「以前に体験していない年齢をもちたかったから」、次に多かったのが「保育実習でしか経験できない低年齢」であることを明らかにした。学生がさまざまな子どもたちと関わり学ぼうとする意欲の現れを感じる一方で、0歳児、0.1歳児、1歳児クラスへの配属なしの多さに、乳児保育担当者として危惧するものがある。この数字から考えると、0.1歳児クラスを経験しないまま保育者になることもあり得ることになる。積極的な気持ちで実習に臨んでいる学生の学びを深めるためにも、就職後の実践のためにも、3歳未満児クラスでの配属日数は重要になってくると考える。

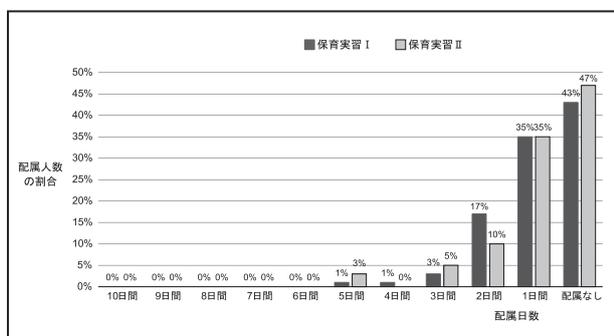


図1 0歳児クラスに配属された日数別人数の割合と保育実習Ⅰ・Ⅱの比較

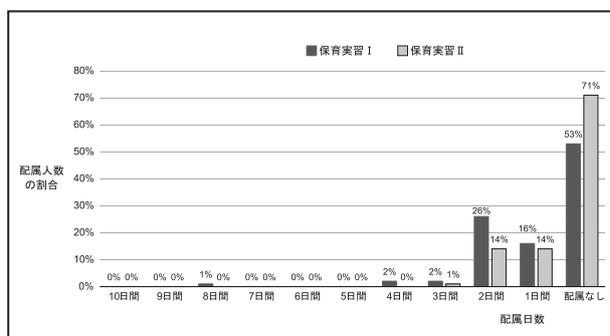


図2 0.1歳児クラスに配属された日数別人数の割合と保育実習Ⅰ・Ⅱの比較

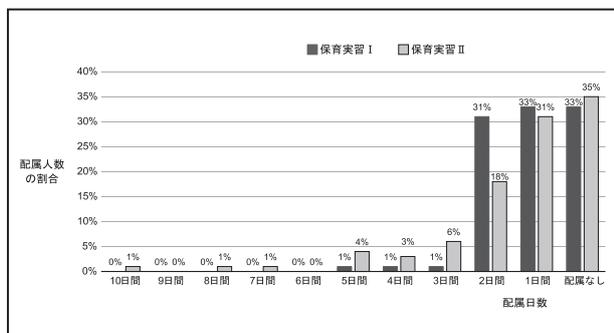


図3 1歳児クラスに配属された日数別人数の割合と保育実習Ⅰ・Ⅱの比較

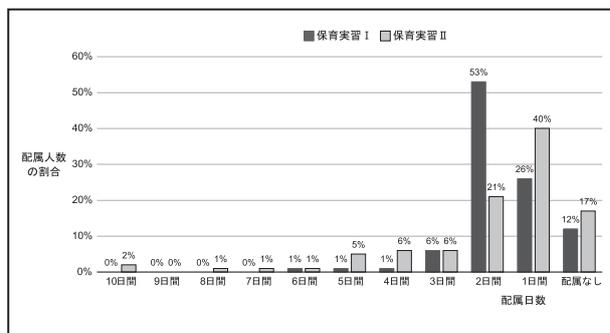


図4 2歳児クラスに配属された日数別人数の割合と保育実習Ⅰ・Ⅱの比較

2) 保育実習Ⅰ・Ⅱにおける3歳未満児クラスでの体験内容

3歳未満児クラスでの体験内容別人数の割合と保育実習Ⅰ・Ⅱを比較したものが図5である。35の体験内容について、①遊び（手遊び、ふれ合い遊び・わらべうた遊び、絵本の読み聞かせ・紙芝居の実演、手作りシアターの実演、手作りおもちゃの実践、運動遊び、制作遊び、玩具遊び、散歩、戸外遊び）②食事（調乳、授乳、離乳食の介助・食事の援助、昼食の準備・配膳・運搬）③排泄（おむつ交換、排泄の補助）④衛生（清拭・沐浴、手洗いの補助、衣類の着脱、歯磨きの援助）⑤睡眠（寝かしつけ、午睡時のチェック）⑥保健（検温、身体測定、内科・歯科検診の補助、ケガの手当）⑦安定（トラブルの対応、不安な子・泣いている子・落ち着かない子の対応、抱っこ・おんぶ）⑧安全（園舎内外の清掃・玩具等の消毒、環境整備、保育室の換気 室温湿度調節、誤嚥・誤飲・転倒・転落・事故への配慮、避難訓練）⑨保護者対応（保護者への対応）⑩その他10項目に分類し、3歳未満児クラスの実習で体験したことを全て選び出してもらった。

遊びの項目では、手遊び、絵本の読み聞かせ・紙芝居の実演では、保育実習Ⅰ・Ⅱにおいて平均で75%の学生が体験していたのに比べ、手作りシアターの実演、手作りおもちゃの実践では、手作りのアイテムが必要となるため、実演や実践している学生の平均は22%であった。また、運動遊びは、保育実習Ⅰでは30%、保育実習Ⅱでは50%であった。制作遊びの体験は、保育実習Ⅰでは14%、保育実習Ⅱでは38%であった。保育実習ⅠとⅡで比較すると保育実習Ⅱでの体験数が多いのは、実習指導において3歳未満児クラスでの短時間実習の実践を勧めていることや、今までの実習で、3歳以上児クラスでの短時間実習や一日実習を実践してきているため、最後の保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰや教育実習で体験しなかった3歳未満児クラスでの短時間実習に挑戦しようとしたためだと推測する。また、散歩、戸外遊びの体験について、保育実習Ⅰと比較して保育実習Ⅱの割合が多いのは、それぞれの実習期間の時期や季節が要因の一つではないかと考えられる。

食事に関する調乳、授乳については、乳児保育Ⅰの授業内容として組み込まれていないこともあり、保育実習Ⅰと比較すると乳児保育Ⅱ受講後の保育実習Ⅱで体験数が増えている。調乳、授乳の体験数が大幅に低いのは、ミルクを食事とする月齢の低い子どもが在園しているか否かにもよる。また、コロナ禍の現状を踏まえ感染防止に努め、実習生からの体験希望に保育者は安易に応えることが難しいのではないかと考えられる。離乳食の介助・食事の援助、昼食の準備・配膳・運搬については、保育実習Ⅱでは69%の学生が体験していた。

生活の援助の排泄や衛生に関わる、おむつ交換、排泄の補助、手洗いの補助、衣類の着脱については、一日の生活の中でくり返し行われる営みである。おむつ交換については、保育実習Ⅰでは71%、保育実習Ⅱでは74%の学生が体験していた。排泄の補助は、保育実習Ⅰでは46%であるが、保育実習Ⅱでは67%の学生が体験している。また、手洗いの補助、衣類の着脱については、60%以上の学生が保育実習Ⅰ・Ⅱともに体験している。日に何度もくり返し行われる生活の援助については、多くの学生が体験していることが明らかになった。また、おむつ交換については、乳児保育Ⅰ・Ⅱにおいて、沐浴人形を使用しおむつ交換の実践演習を行っている。授業での学びを、実際の子どもで実践し保育力をつけるため、学生は保育実習で積極的に体験していることも推測できる。

衛生に関する技術や実践力が必要となる清拭・沐浴については、保育実習Ⅰ・Ⅱどちらも1%の体験者がいた。乳児保育Ⅱでの学びを必死に現場で習得しようとする学生の意欲と、現場の保育者が実習生の育成に前向きに取り組む姿勢が窺える。歯磨きの指導については10%前後と少数であった。歯磨きは、子どもたちが動き回ったり泣いて嫌がったりすることや、歯ブラシの取り扱いについての注意が必要である。月齢や年齢に合わせた歯ブラシ等の物品の準備や演習授業に取り入れるべき内容か検討していく必要がある。

睡眠の項目寝かしつけについては、保育実習Ⅰ・Ⅱともに85%以上が体験している。午睡は月齢や年齢によりタイミングや時間、必要性も変わってくるが、心地よい安心した環境の中で眠ることで、生活

のリズムが整えられ情緒が安定する。おむつ交換や排泄、手洗いの補助のように、日に何度もくり返し行われる行為ではないが、寝かしつけの体験数が多いのは、子どもたちが安心して眠れるよう、ゆったりと一対一または、少人数での対応が必要となるためだと推測する。

保健の項目となる身体測定や内科検診・歯科検診の補助については10%前後の体験数であった。身体測定は、月一度となるため、予定があれば体験は可能となるが、月に一度となると難しいのが現実である。

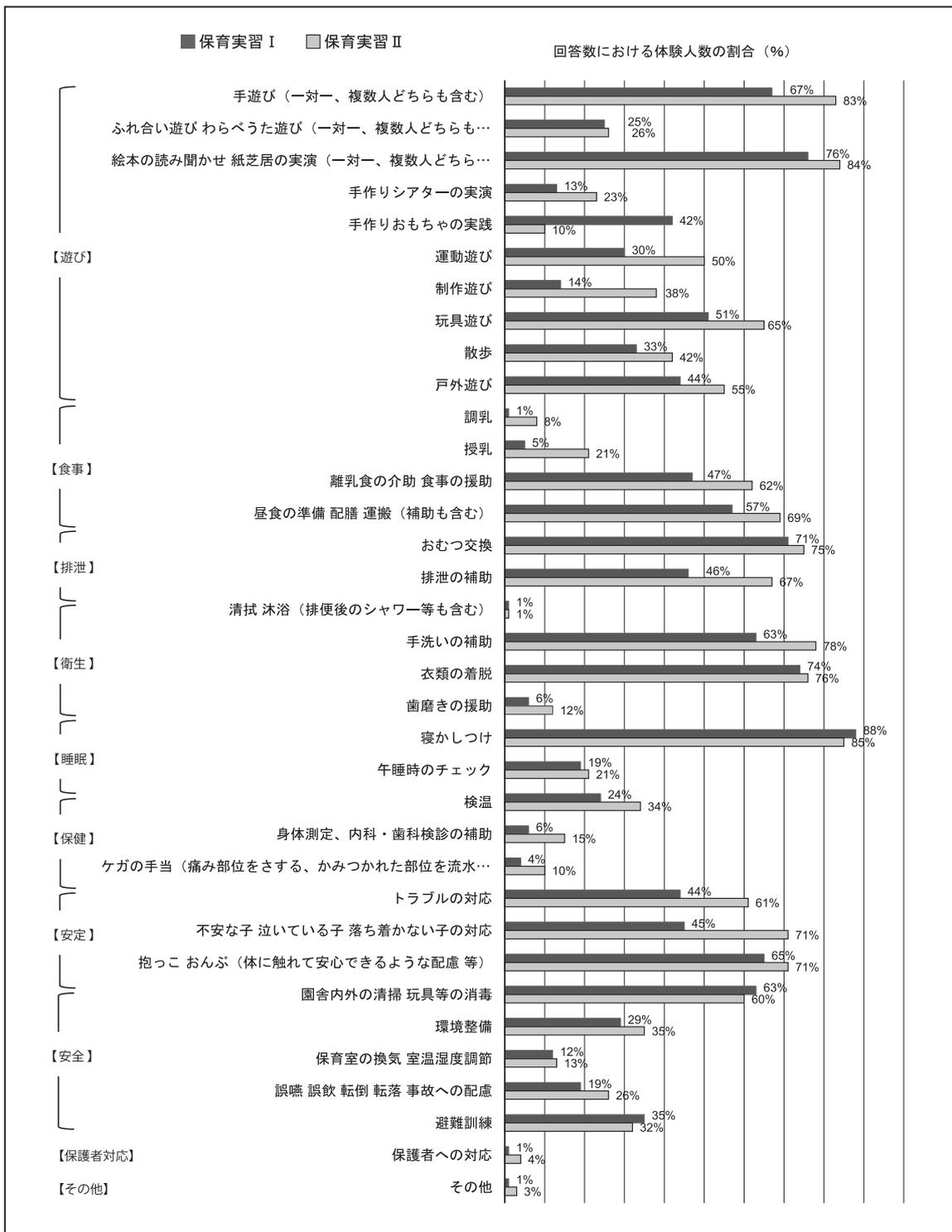


図5 3歳未満児クラスでの体験内容別人数の割合と保育実習 I・IIの比較

これらの体験は大変貴重になるので、配属予定があれば積極的に体験してほしいと考える。また、ケガの手当てについてであるが、10%以下の学生が体験していた。遊具にぶつけた部位をさする程度と救急箱の用品で手当てる場合とで違いはあるが、さすったり、なでたりする「手当て」も子どもたちの情緒の安定を図るためには重要である。

安定の項目トラブルの対応や不安な子・泣いている子・落ち着かない子の対応、抱っこ・おんぶに関しては、保育実習Ⅰ・Ⅱともに半数以上が体験している。1.2歳児は、自我が芽生えはじめ、好きなモノや人、空間を自己主張するようになるが、自分の思いを上手く言葉で伝えられないため、モノの取り扱いから噛んだり、ひっかいたりして自分の思いを表現する。そのような場面が保育の中でも頻繁に起こるため、半数以上の学生が体験しているのではないかと推測できる。また、揺れ動く子どもの気持ちを抱っこやおんぶなどのスキンシップにより情緒の安定を図るため、抱っこ・おんぶについても同様な結果となったのだろう。

安全に関する園舎内外の清掃玩具等の消毒や環境整備、保育室の換気室温調節については、子どもの生活の場を安全、清潔に保つため大切である。直接子どもと関わる以外の保育業務に関しても、保育の仕事を理解するために、実習生は自ら進んで手伝う必要がある。また、誤嚥・誤飲・転倒・転落事故への配慮については、保育実習Ⅰ・Ⅱともに20%前後であるが体験していた。保育実習Ⅰ・Ⅱともに30%前後の体験数であった。避難訓練についても、身体測定同様に、月一度の避難訓練の日程があれば体験は可能となり、日程が配属期間に重なった者が体験したと考えられる。

保護者対応については、ごく少数が体験している。実習生として、保護者と関わるのは挨拶程度となるが、少数が体験したのは、具体的にどのような体験内容だったのか気になるところでもある。

その他の体験内容として、発表会やお遊戯会の練習の補助、誕生会への参加、散歩時のベビーカー押しの体験等の回答もあった。

学生は、実習中に子どもたちと生活する中で、さまざまな必要な体験をしているが、その体験についてはばらつきがある。捉え方にもよるが、玩具遊びや排泄の補助を体験していない学生もいる。3歳未満児クラスの日々の保育の中で頻度の高いことでも体験していないのは、配属日数が少ないためだと推測する。一人ひとりの生活リズムが違ったり、人見知りがあったりする3歳未満児は、ある程度まとまった期間配属されないと体験できないことがあると考える。

3) 保育実習Ⅰ・Ⅱの3歳未満児クラスにおいて、困惑したことや大変だったこと

保育実習Ⅰ・Ⅱにおいて、3歳未満児クラスでの体験のなかで困惑したことについては、保育実習Ⅰでは232のコードが、保育実習Ⅱでは173のコードが抽出された。保育実習Ⅰ・Ⅱともに5つのカテゴリ①子どもとの関わり ②生活の援助 ③遊びの援助 ④保育者とのコミュニケーション ⑤その他 で整理分類することができた。

保育実習Ⅰ・Ⅱともに、多くは直接的な子どもとの関わりに困惑していた。保育実習Ⅰでは、関わり方、気持ちのくみ取り方、言葉がけなどの基本的な子どもとの関わりに困惑していた。子どもたちから話しかけてくれる3歳以上児とは違い、コミュニケーションの取り方がわからなかったようである。しかし、保育実習Ⅱになると、トラブルや人見知りへの対応、気になる子への対応など、知識や実践力、経験が必要となる子どもへの関わりに困惑していた。これは、保育実習Ⅰの経験を積んだことで、視野が広くなったり、子どもたちとの関わりが深くなったりしたこと、保育実習Ⅰでの学びをいかし実践しようとしたからだと推測する。

さらに、3歳未満児クラスでは基本的な生活習慣の確立のための援助も保育者の大きな役割を占めている。発達に個人差もあり食事の援助やおむつ交換など、一人ひとりにあった対応をしなければいけない。乳児保育の演習では、沐浴人形を使っておむつ交換や沐浴を行っている。しかし、実際の子どもたちは

動き回り泣いて嫌がることもある。食事の介助の場面を想定し、好き嫌いのある子どもの対応の仕方なども演習するが、学生の考えた通りの展開にはならず、発達や個性、その時々のお気持ちの揺れ動きに困惑したのであろう。保育実習Ⅰでは、ケガ防止やケガへの対応に困惑した学生もみられた。各年齢や月齢の子どもの発達について授業の中で学習するが、実際の子どもと関わり、つかまり立ち一人歩きを始めたばかりの子どもに対して、安全面に配慮しながらどのように援助するべきか困惑したのではないかと考える。

遊びの援助に関しては、言葉でのコミュニケーションが難しく、身振り手振りや表情を介しての子どもを目の前にして言葉選びに困り、絵本の読み聞かせや紙芝居の実演に難しさを感じる学生もいた。また、授業内での部分実習の立案や実際の保育実習Ⅰ・Ⅱにおける短時間実習・一日実習は、3歳以上児クラスで行うことが多く、3歳未満児を想定した計画・実践の少なさから困惑する学生もいた。個別対応が多く、一斉活動を行うことが少ない3歳未満児クラスである。一斉保育にとらわれない、短時間実習・一日実習の立案や模擬保育の必要性を感じる。

保育者とのコミュニケーションについては、保育実習Ⅱに比べて保育実習Ⅰにおいて困惑さを感じていた学生が多かったのは、実習経験差にもよるものと考えられる。保育実習Ⅰの中では、初歩的な保育者への質問の仕方に困惑したという回答もあった。忙しい保育者にどのタイミングで話しかければよいのか、タイミングをつかむのに困惑するだけでなく、複数担任制でクラスの主となる先生がいたり、その日一日主担当としてクラスをまかされる先生がいたりすることも困惑の要因と考える。その他「担当制について理解不足」「よだれが実習着につき戸惑った」は、3歳未満児クラスならではの回答である。

これらの困惑したことに対して、図6 保育実習Ⅰ・Ⅱの3歳未満児クラスにおいて、困惑したことを誰に相談したか回答を求めたところ、半数以上58%の学生が3歳未満児クラス担当保育者に相談していた。多くの学生が、クラスの子どもたちを理解している3歳未満児クラス担当保育者に相談することで、困惑したことを解消している。最も身近な存在である3歳未満児クラス担当者に、それぞれの場面での状況やその時の心情を理解してもらいながら、困惑したことにタイムリーにきめ細かくご指導していただき解決していくことで、より一層学びが深まるのではないかと考える。また、自己解決したのは18%、

表4 保育実習Ⅰ(保育所)の3歳未満児クラスにおいて、困惑したことや大変だったこと

カテゴリ	抽出された観点	件数
子どもとの関わり (140)	関わり方	27
	気持ちのくみ取り方	24
	言葉かけ	23
	トラブルの対応	22
	人見知りへの対応	20
	発達に合わせた援助の仕方	17
	気になる子への対応	4
	イヤイヤ期の対応	3
	生活の援助 (72)	おむつ交換
離乳食の介助や食事の援助		17
ケガ防止やケガへの対応		13
午睡時の寝かしつけ		6
おんぶや抱っこ仕方		5
衣類の着脱の援助		2
授乳や調乳の仕方		2
検温の仕方		1
アレルギー児への対応		1
避難訓練時の対応		1
遊びの援助 (9)		絵本や紙芝居、手遊び等の実演方法
	遊び方	3
	短時間実習	2
保育者とのコミュニケーション (4)	複数担任制で保育者が多い	2
	保育者への質問の仕方	2
その他 (7)	実習初日何もかも始めてで緊張した	6
	よだれが実習着につき戸惑った	1

表5 保育実習Ⅱ(保育所)の3歳未満児クラスにおいて、困惑したことや大変だったこと

カテゴリ	抽出された観点	件数	
子どもとの関わり (83)	トラブルの対応	25	
	人見知りへの対応	14	
	気になる子への対応	10	
	言葉かけ	9	
	発達に合わせた援助の仕方	7	
	気持ちのくみ取り方	7	
	関わり方	6	
	イヤイヤ期の対応	5	
	生活の援助 (66)	離乳食の介助や食事の援助	22
		おむつ交換	19
		おんぶや抱っこ仕方	7
授乳や調乳の仕方		6	
午睡時の寝かしつけ		5	
ケガ防止やケガへの対応		4	
衣類の着脱の援助		2	
検温の仕方		1	
遊びの援助 (18)		遊び方	8
		短時間実習や一日実習	7
	絵本や紙芝居、手遊び等の実演方法	3	
保育者とのコミュニケーション (2)	複数担任制で保育者が多い	1	
	何をしても否定的な評価	1	
その他 (4)	早番遅番担当	1	
	風邪がうつってしまうこと	1	
	担当制について理解不足	1	
	マスク下で、笑顔が伝わっているか心配	1	

主任、園長に相談した12%、友人に相談した7%であった。友人への相談の割合が少ない結果となったのは、実習から帰宅して日誌の記録や指導案の立案などあり、それぞれが実習期間のため自身のことで精一杯になっていることも推測できる。保育者養成校の教員に相談したのは2%、何もなかった学生は0%であった。保育者養成校の教員に相談した割合が少ないのは、教員の勤務時間と実習時間が同時帯であることが多く相談する機会を得ることが難しいためだと推測する。

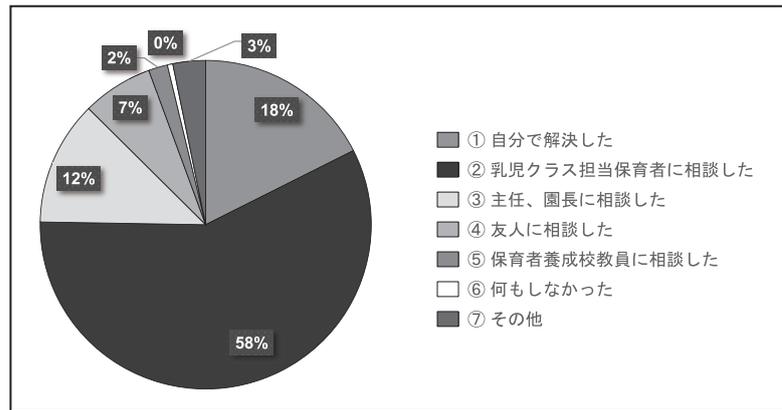


図6 保育実習Ⅰ・Ⅱの3歳未満児クラスにおいて困惑したことを誰に相談したか。(複数回答可)

その他の中には、「インターネットで調べた」「文献で調べた」「家族に相談した」等の回答もあった。実習中は、担当保育者に相談できるが、実習終了後は、身近にあるものを利用し解決しようとしている。実習で困惑したことをそのままにせず、何かしらの手立てをしていることがわかった。

4) 保育実習Ⅰ・Ⅱを体験し「乳児保育」の授業内容に取り入れてほしいこと

保育実習Ⅰ・Ⅱを体験し「乳児保育」の授業内容に取り入れてほしいことについて、保育実習Ⅰでは163のコード、保育実習Ⅱでは108のコードが抽出された。4つのカテゴリ ①生活の援助 ②遊びの援助 ③子どもとの関わり ④その他 で整理分類することができた。抽出された内容については、多くが「乳児保育Ⅰ」ないし、「乳児保育Ⅱ」で教授している内容であるが、3歳未満児クラスでの実習体験から、さらに乳児の保育を行う上で必要だと感じる知識や技術として回答したのではないかと推測する。

保育実習Ⅰ・Ⅱの回答数が一番多かったカテゴリは、生活の援助についてであった。特に3歳未満児の保育では、養護「生命の保持、情緒の安定」が重要である。生命の保持に関しては、離乳食の介助や食事の援助の場面において、食物アレルギーへの対応、誤飲や誤嚥等、安全面に配慮し一人ひとりに合わせて関わる保育者の姿から、保育現場は子どもの命を守る場であることを認識していることが窺える。また、健全な心身の発達を促す生活の場であることも体験的に学習したのではないかと考える。情緒の安定については、おむつ交換の場面において、担当保育者は汚れたおむつを取り替えながら、「すっきりしたね。気持ちよかったね。」などと子どもの思いをくみ取り言葉をかけ信頼関係を深める。そのような保育者と子どもの様子を観察し、おむつ交換、おんぶ抱っここの仕方、離乳食の介助や食事の援助、授乳や調乳の仕方などの基本的な生活習慣の確立のための援助の重要性を認識したため、生活の援助についての回答が多かったのではないかと考える。回答のなかには「何度か練習を重ねたい」「複数回行いたい」「多く取り入れてほしい」という記述も加えられていた。おむつを取り替えるだけでなく、「言葉をかける」、「健康の観察をする」、「コミュニケーションをとる」など、保育現場で実践する時には適切に関わりたいという学生の思いや、くり返し練習を重ねることで能力向上を目指す姿勢が感じられる。学生の意欲を大切にし、自主的に実践学習に取り組めるよう、実習前には演習室の確保や必要な物品等を自由に利用できる環境を整える工夫も必要であると考えられる。

次に回答が多かったのは、遊びの援助である。子どもと関わるきっかけ作りとなるだけでなく、子どもの発達を促したりする遊びの援助についても、実際に経験することでその必要性を感じたと推測する。また、言葉の発達には、生まれてからおおよそ1年後ぐらいから「ママ」などの単語、その後「ワンワン、きた」などの二語文を話し始め、だんだんと会話に近い言葉を話すようになってくる。言葉について取

りあげると、保育所保育指針では、0歳児の保育として3つの視点に分けて述べてあり、社会的発達に関する視点「身近な人と関わり気持ちを通じ合う」は、5領域の言葉の獲得に関する領域「言葉」にも分化していく。言葉の発達のためには、日常生活のさまざまな経験や、周りの大人との関わりの積み重ねがとても大切である。学生は保育者が子どもをひざの上のにせ、優しい表情で絵本の読み聞かせを行う姿や、複数人の子どもの前で反応を受けとめ楽しみながら紙芝居を演じる様子を体感し、絵本や紙芝居についての知識や実践力を深める必要があると考えたのであろう。また、意思疎通が難しく、人見知り時期の子どもと関わり、コミュニケーションの方法や興味を惹きつける手段として、ふれ合い遊び、わらべうた遊び、手遊びなどの保育の引き出しが必要であると感じたのではないかと考える。

子どもとの関わりについては、保育実習Ⅰの後では、言葉がけを回答する学生が多く、また、保育実習Ⅱの後には、トラブルの対応が目立った。保育実習Ⅰでは、乳児と関わるのが初めての学生もいるため、言葉と話さない子どもに対して、どのような言葉をかけるべきか困惑した経験から、子どもへの言葉がけを取りあげたのであろう。また、保育実習Ⅱの後に、トラブルの対応を回答する学生が多かったのは、卒業年次生として現場の保育者に任されることが増えたことや、積極的に子どもと関わるが故トラブル場面に遭遇する機会が増えたことが考えられる。子どもの気持ちをくみ取り代弁し、自我の芽生える時期の子どもの揺れ動く気持ちに対して、テキスト通りの対応では上手くいかず困惑した経験が要因の一つでもあったと考えられる。また、人見知りやイヤイヤ期の対応、気になる子への対応などの回答も散見された。人見知りが起こるのは、いつも自分の身近にいて世話をしてくれたり遊んでくれたりする人が愛着の対象として特別な存在になるとともに、見慣れた顔と見慣れない顔との違いを認識する力が育ってくるからである。3歳未満児クラスに配属されると、人見知り時期の子どもが自分をみて泣き出す姿に自信喪失してしまった学生もあり、何とか克服したいという思いから回答したのではないかと考える。

表6 保育実習Ⅰ(保育所)を体験し「乳児保育」の授業内容に取り入れてほしいこと

カテゴリ	抽出された観点	件数	
生活の援助 (100)	おむつ交換	37	
	おんぶや抱っこの仕方	22	
	授乳や調乳の仕方	13	
	離乳食の介助や食事の援助	10	
	沐浴や清拭	7	
	衣類の着脱の援助	3	
	ケガ防止やケガへの対応	3	
	避難訓練時の対応	2	
	午睡時の寝かしつけ	1	
	歯磨きの援助	1	
	嘔吐の処理や対応	1	
	遊びの援助 (31)	ふれ合い遊びやわらべうた	7
		絵本や紙芝居	6
遊び方		5	
手遊び		5	
手作りおもちゃ制作		3	
制作遊び		2	
話の進め方や実演の仕方		2	
パネルシアターやペープサート	1		
子どもとの関わり (24)	言葉がけ	8	
	関わり方	5	
	トラブルの対応	5	
	人見知りへの対応	4	
	気持ちのくみ取り方	1	
気になる子への対応	1		
その他 (8)	乳児の動画の視聴	3	
	発達過程の学習	2	
	実際に赤ちゃんに関わる機会	1	
	模擬保育	1	
	複数担任制での保育者とのコミュニケーション方法	1	

表7 保育実習Ⅱ(保育所)を体験し「乳児保育」の授業内容に取り入れてほしいこと

カテゴリ	抽出された観点	件数	
生活の援助 (56)	離乳食の介助や食事の援助	16	
	授乳や調乳の仕方	16	
	おむつ交換	13	
	おんぶや抱っこの仕方	7	
	沐浴や清拭	2	
	衣類の着脱の援助	1	
	手洗いの援助	1	
	遊びの援助 (29)	絵本や紙芝居	6
		手遊び	5
		制作遊び	5
ふれ合い遊びやわらべうた		4	
話の進め方や実演の仕方		4	
遊び方		3	
子どもとの関わり (18)	パネルシアターやペープサート	1	
	手作りおもちゃ制作	1	
	トラブルの対応	8	
	言葉がけ	5	
	人見知りへの対応	2	
その他 (5)	イヤイヤ期の対応	2	
	関わり方	1	
	発達過程の学習	2	
	乳児クラス初日に把握すべきこと 担当制について	2 1	

その他には、保育実習Ⅰ・Ⅱあわせて、乳児の動画の視聴、発達過程の学修、模擬保育、実際の赤ちゃんと関わる機会、複数担任制での保育者とのコミュニケーション、担当制について、3歳未満児クラス初日に把握すべきこと、といった内容の回答があった。以上の内容についても、授業の充実をはかる上で重要な内容であると考え。模擬保育については、3歳以上児を対象年齢として実習指導等の授業で実践しているが、3歳未満児を想定した模擬保育は行っていない。より実践力をつけるためにも、3歳未満児クラスでの短時間実習や一日実習の計画立案やそれをもとに模擬保育を行うなど、シラバスの検討が必要である。また、実際に赤ちゃんと関わる機会については、コロナウイルス感染状況を考えると難しい現状ではあるが、収束後には、子育て支援施設等でのボランティア活動の参加を促し、3歳未満児と触れ合う機会の確保に繋げるべきであろう。さらに、複数担任制での保育者とのコミュニケーションについては、保育の流れに沿ってどのように動くべきか分からず、クラスに保育者が複数人いるのも関わらず、どのタイミングでどの保育者に分からないことを質問すべきか困惑し、保育者とのコミュニケーションがとれないまま3歳未満児クラスでの数日間の実習が終了してしまうことも要因であると考えられる。そのためにも授業の中で、複数担任制や担当制、リーダー、サブリーダー等の役割分担について、3歳未満児クラスの保育室の環境等に触れながら教授することが必要である。また、学生が具体的なねらいをもって実習に臨めるよう指導すること、学生自身が、保育者に対して教えてくださいという謙虚さをもちつつ、さまざまな保育の場面で積極的に取り組む姿勢も保育者とのコミュニケーションをとる上で大切な態度ではないかと考える。最後に、乳児クラス初日に把握すべきことについては、実習に合わせた直前の指導と授業時間の確保も重要な課題である。

保育実習Ⅰ・Ⅱを体験し「乳児保育」の授業内容に取り入れてほしいことは、4つのカテゴリの中で基本的な生活習慣の確立のための援助である生活への援助が多かった。しかし、保育実習Ⅰ・Ⅱの3歳未満児クラスにおいて、困惑したことや大変だったことの多くは直接的な子どもとの関わりであった。必ずしも学生の困惑したことや大変だったことが、授業内容に取り入れてほしいことと直結しているとは限らないことも明らかになった。授業の中で取り入れてほしい内容については、ほとんどが講義や演習で教授している内容であった。基本的な生活習慣の確立のための援助である生活の援助にあたる内容や直接的な子どもとの関わり遊びの援助についても、引き続き今後の授業の中で重点的に教授していかねばならないと考える。回答が少なかった内容に関しても、シラバスの見直しも含め検討していく必要があると考える。

Ⅳ. 今後の「乳児保育」の課題

乳幼児と直接関わるができる保育実習は、さまざまな貴重な体験ができる機会であり、特に3歳未満児の子どもと関わるができるのは、保育実習に限られている。今回の調査結果において、保育実習Ⅰ・Ⅱ合わせ3歳未満児クラスでの実習は1日間及び2日間が大多数であることが明らかになった。また、3歳未満児クラスのすべてのクラスに配属されていない可能性があることも分かった。発達に著しい差があるこの時期の子どもたちと共に生活することでしか学べないこともある。実習園に3歳未満児クラスの全てがない場合もある。実習園と連携し3歳未満児でのクラスの配属日数が充実した内容となるよう、今後日数も含め検討していく必要がある。

このように3歳未満児クラスの配属日数が少ない中で、3歳未満児の保育について十分な体験ができていると言いがたいが、短期大学では2年間、専門学校であれば2年もしくは3年間の中で、保育の専門的な知識と技術、そして保育実践力をつける必要がある。保育者として必要な資質能力を確実に身に付けるためには、養成校での授業において学生の主体的な取り組みが重要である。

他の授業と同様に乳児保育の授業方法についても、ロールプレイングやグループワーク、事例検討、

模擬保育等を積極的に取り入れ、保育スキルの向上を目指す必要があると考える。特に、3歳未満児を想定した、一斉保育にとられない短時間実習や一日実習の立案や模擬保育の必要性を感じる。また、人見知りや自己主張の時期の子ども、気になる子どもへの対応などについて、テキストだけではなく、実習での体験談からの事例検討やグループワークを行い、学生同士が学び合えるような工夫も行うべきである。さらに、言葉でのコミュニケーションが難しい時期の3歳未満児クラスの子どもの姿を想定し、子ども役と保育者役に分かれてロールプレイングをしたり、保護者役と保育者役になり3歳未満児クラスの保護者対応についてロールプレイングで応用力を身につけたり、授業方法も含めたシラバスの見直しも重要な課題である。

授業内容について、保育実習Ⅰ・Ⅱを体験し乳児保育の授業に取り入れてほしいことについて調査した結果、多くが「乳児保育Ⅰ」や「乳児保育Ⅱ」で教授している内容であった。授業の中で、おもちゃ交換、抱っこ・おんぶ、沐浴・清拭、調乳・授乳の仕方などについて今まで通り実践演習を行い、しっかりと保育実習に繋げて行けるような教授の工夫も必要である。学生の意欲を尊重し、保育技術の習得や能力向上のために、沐浴人形を用いての実践学習を繰り返し行えるための時間と場所の確保についても検討する必要があると考える。

また、「乳児保育」「実習指導」の担当教員だけではなく、「保育内容総論」「子どもの保健」「子どもの食と栄養」「子ども家庭支援の心理学」などの乳児保育に関連する担当教員と連携し、体系的な乳児保育の学びとなるようにしていくことも必要な課題である。

今回の調査では、乳児保育の授業の充実を図り、保育実習Ⅰ・Ⅱを対象とした3歳未満児クラスでの配属日数と体験内容、困惑さなどについて調査ならびに分析を行った。今後、養成校を卒業した新任保育者についても追跡調査を行い縦断的に進めていきたい。

謝 辞

本研究にあたり、たくさんの質問項目でありながら丁寧に回答してくださった学生の皆様に感謝いたします。

[引用・参考文献]

- 1) 厚生労働省「保育所等関連状況のとりまとめ(令和2年4月1日)」令和2年9月4日
- 2) 小屋美香「保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究」育英短期大学研究紀要 第27号 2010年2月
- 3) 森美利花・後藤永子・古市久子「実習前後に学生が担当希望する子どもの年齢について ―保育士養成校に通う学生の実習における意識変更―」東邦学誌 第39巻第2号 2010年
- 4) 船越利代子「“乳児保育”授業における課題―保育所実習アンケート分析から―」つくば国際短期大学研究紀要 第38巻 2010年3月
- 5) 加藤房江「乳幼児における模擬保育の試み1―卒業生の課題を手がかりに―」埼玉純真短期大学研究論文集 第9号 2016年
- 6) 藤重育子「保育専門科目「乳児保育」における授業展開についての再検討」園田学園女子大学論文集 第52号 2018年1月